

## 1 はじめに

## ① この文章を書いた理由

- ・最近の研究会に対する私の意見 2P・5P・6P
- ・でも、方向性としては、正しい。24P　そして、イノベーター理論の説明 3P  
さらに、運動の輪を広くしていくために!!
- ・都市生活者にとっての、「根付き」と「成熟」とは？ 東京での研究会は、その一あり方の一つの提示であろう。新聞にも掲載されていた。私は、このような多様な取り組みを、整理してしなくてはならない、思う。

## ② 私は何故、この研究会でしゃべるのか

「縮小社会」についても、「縮小」の必要性やその未来予想については多くの方が語り、共通とする認識はそれなりに成立している。しかし、肝心の「社会」については、いろんな意見やそのイメージが入り乱れている。それで、意見がなかなかみ合わない。石田氏との意見の相違は、このこと示している。

社会の使用するエネルギー量が減少すれば、それでよいのではない。減少するためには、それに伴って人々の意識が、社会の在り方が変容しなくてはならない。そうならないと、縮小なんて、とてもできないであろう。このことについて論議するとき、その前提として、諸個人のもっている「社会観」表明、そしてそのぶつかり合いをへないと、建設的な話し合いにはならないであろう。それで、「社会とは、何？ 社会意識についての現象学的思考」を書いた。ここには、思想家たちからの引用はない。私の心に浮かぶ社会像を記載している。

## ③ 人々の意識状況に視点を当てて

「縮小」して良いことなど思い浮かばないのですから、「縮小」を叫んでも、私の近くにいる多くの方は振り向きもしない。この分厚い壁のような人々の意識状況にぶつかって、私は思考をしている。現在、人々はどのような状態に、どのような意識状況にいるのか。何を望んでいるのか。このことに視点を当てて、私は思考していきたい。

・私は、「縮小」の必要さを人々が納得するには、「成熟」意識の涵養や、「根付く」方策を実施することが大切であろうと、考えているのです。そうしないと、多数の人たちが「縮小」の必要性を納得しないであろう。「根こぎ」「遅れ」の意識が、拡大成長路線が多数派となっている現状\*である。この「遅れ」ゆえの「もっと、もっと」の意識は、拡大成長意識のフロンティア、未開の開拓地となっている。ここから、成長を求める意識

が補給されている。この方策には、即効性はない。でも、このような方策は必要であろう。

#### ④ なぜ、環境政党はなかなか認知されないのか

今までの人類のしてきた過ちと比べて、今後私たちが遭遇することが予想されている危機は、今までとは異なっていることに、おおいに注意しなくてはならない。

人類の致命傷となるかもしれない環境問題の本当に恐ろしいのは、破局が誰の目にもはっきりしているけれども、それが突発的なものとして、そして鮮明なものとしてはすぐには現れないことであろう。環境問題は急性の疾患としてではなくして、慢性の病状として現れてくるものであるからだ。

おかしい、これではいけないかな、なんていうかすかな予感から始まる。そしてこの異変が明瞭になってきた時には、その原因となっている諸要素は、もう取り除けない、後戻りできないものとして現れ出てくるものであろう。

問題が数字として、御用学者たちの言う数的な根拠がはっきりした時は、もはや破局へのスピードが加速し始めていることとなる。大気中や、水辺、そして海の中、さらに土壌の中に蓄積された物質が、どの時点ではっきりとした毒性を示すのか、人類に害をなすのかが、その境界はいつもはっきりとはしていない。だから、「安全」だと、彼らは言う。

環境破壊は、真綿で私たちの首をじわじわと締め付けてくる。長い年月をかけてじわりじわりと、私たちに迫ってくる。だから、問題を先延ばししようとする。この問題が私たち人類にとって致命的な問題であることを、誰もが知っている。でも、今の時代の私たちは、もういない。そのために、自分の問題としての認識が薄くなる。

★私たちには、未来の他者達、まだ生まれてもいない人たちへの配慮と責任が、そして、このことを思考するだけの知識と思考力がいる。

\*この箇所は、発言することがなかった。

でも、日本の山野は、緑が有り余って、農業では日々格闘している現実がある。目を開ければ、一面の緑が飛び込んでくる。私たちは、緑をいかにして少なくするかで、日々苦勞している。外国の政党の名称をまねても、この田舎では、その真意はなかなか伝わらない。→都市生活者の発想とみなしてしまう。

また、香川の彼らは、意見の異なる人たちと一緒に行動を嫌う。意見が違っていても、よいではないか。まずは、一緒にすることで信頼関係を築くことがないと、運動の輪は大きくなりえない、と思うのだが。

## 2 全体の説明

\*これは、「遅れの意識」克服の方策を、思うままに既述したものである。次元の異なるのも含まれているが、ご容赦願いたい。

・補足

○新規農業就労者にとっては、身体を肉体労働者としなくてはならない。

低収入ときつい肉体労働に耐えることが必要となります。灼熱の真夏に田に出て水の管理をしなくてはならない時もあります。これは、賃労働では、なかなかできないことです。都会から流れてきた、世にいう「負け組」の人たちがある農事法人に職を得ていましたが、このしんどい労働ができなくて、水の管理ができなくて、その田では米がほとんど取れませんでした。そこで、次の年、社長が細かく指導すると、なんと労働をさぼりだしました。ストライキですね。年に一度しか収穫できない農産物を生産しているところでは、この争議は成功しません。収穫できないと、そしてそれが売れないと、価値は発生しません。売れたからこそ、そこに労働価値が含まれているかのごとく思うことができるのですから。交換関係が、販売が成立することでしか、剰余価値は成立しないのです。

○そして、それに付き合ってくれる女の人が必要である。

### 3 終わりに

・人の意識を変えていくことは、難しい ゴミ捨ての話

私が『とんでもないことが! 美しいことを夢見て醜いことをする』を書きかけとなったことが、本の最初に書いています。小さな祠の再興に関係する人たちのことを書いています。この祠の再興を言い出した人たちの中に、次のような人がいました。\*実はこの人が、本に書いている騒動の中心人物でした。

今年の九月のある日、私の 90 歳近くになる母が朝、散歩していました。すると、私たちの住んでいる小さな谷を流れている川に、缶・ビン・紙屑、その他もろもろを川に捨てている人がいました。母は、おもわず、「まあっ」と声に出してしまいました。すると、その人はアワテテ、軽トラックに乗って逃げました。

でも、その人は、自分の家に帰るのではなくして、近所の他の人の家に逃げ込んだのです。そして、車から出てきよきよしたそうです。このごみは、私の家ではありません。ここの家のごみを捨てていたのですと、言いわけするように、……。

その人の日頃の行動を知っている母は、そのあまりにも姑息な態度にあきれてしまい、ため息をついて、また散歩を始めたとのことでした。

それを聞いた私は、感心してしまいました。他の人のことなどどうでもよい。社会のことなどどうでもよい。自分さえよければという生き方を徹底していることに。この人は、「ごみを川に捨てて何が悪い。今日は、たまたま見つかってしまっただけ。」このように思っているようです。

このような人であることが、祠の再興を進めていた周囲の人たちにもはっきりとわかってしまったので、本に書いているような騒動は空中分解してしまいました。

でも、このように「自分さえよければ」で徹底できることは、一つのすごい能力だと思います。他の人にはない、能力です。このことは、認めなくてはならない。祠の再興を進めていた周囲の人はこの徹底さについていけなかったのです。多くの人は「我執・我欲・執着・貪欲」の意識をもちながらも、「地域のために」・「自治会のために」・「宗教のために」なんていうお題目がないと動けないのです。これらの人は、昔ながらの村落共同体の意識にとらわれている人たちなのです。彼らは、良いことをしているとの意識で、自治会内の他の人たちに宗教の強制をしようとしていたのです。昔ながらの互酬的な人間関係を再度強化させることが良いことだと、美しい物語を心に描いて、私に向かってきたのです。

このような人の意識の底流にある旧来からの共同体的な意識を解体させるには、貨幣経済の進展が最も強力にきくのです。

ここに書いたような個人的損得に徹底している人とは、会話など成立しません。いくら話しても、その立っている地平が異なっているので、……。でも、他の周囲人の意識を変えていけば、このような人がいても、大きな問題とはなりません。

だから、その対策が、方策の実施が必要である。

・成熟と根付きのために、南瓜(カボチャ)栽培を通して

都市と農村が自覚的に積極的に関わられるようになるために

4月に普通のカボチャを植え付ける。→7月に二回目の種まき

4月に「南部南瓜」と「まんじろう」を植える。

「南部南瓜」は10月まで実をつける。12月や1月まで保存がきく。

「まんじろう」は、11月初めまで、実をつける。そして、2月まで保存できる。

どちらも、味や形態に難点はあるが、料理の仕方でおしく食べられる。南の国から輸入したカボチャを冬に食べなくてもよいのだ。石油を消費して輸送された物を食べなくてもよいのだ。経済活動をすればするほど、石油メジャーと中東の産油国を富ますことをしないようにしよう。

でも、「南部南瓜」と「まんじろう」は、なかなか売れない。消費者が、買わない。ここに、農家だけではどうにもならない現実がある。この現実を突破するには、都会の理解ある人たちと結びつかないといけない。この両者が結びつくためには、どうするか? このことについて、引き続き思考していきたい。

・「成熟」とは何?

京都橘大学 碓井敏正 「革新の再生のために 成熟社会再論」

今回は、「成熟」について、そのより積極的な方策について、いろいろと思考

## 所得政策 疎にして密な多様なネットワークの形成

### ・『里山資本主義』的な事、「竹伐採事業」について

これの事業化を、NPO化をしたいが、伐採という重労働をとまなうので、そうとう工夫しなくてはならない。今が、チャンス 役所への失望と反発 議員選挙の時期

### ・山田氏の意見と返信 資料を参照

メール交換をするとは、相互理解を図ろうとするものであろう。理解しあうことを目的としている。理解するとは、このことによって、今までの自分が変わっていくことであろう。そして、その相手の人の言っていることに、自分と共通する何かを発見していくことである、と言えよう。

自分と共通する何かを、お互いに発見することができたであろうか。ここが問題である。